

調査研究活動実績

氏名 野町雅樹

本年度（27年4～28年3月分）の政務調査研究に関する、主な活動の実施状況を報告します。

報告項目

1 産業振興に関する調査研究

- (1) 畜産振興（土佐ジロー、はちきん地鶏等）に関する調査研究
- (2) 次世代型園芸ハウス団地等に関する調査研究
- (3) 県産農産物の流通事情に関する調査研究
- (4) 台湾における観光産業及び本県産品の流通事情に関する調査研究

2 防災対策に関する調査研究

- (1) 南海トラフ地震津波対策等に関する調査研究

3 地域行政課題全般に関する調査研究

- (1) 県及び市町村の関係部局が行う事業等に関する聞き取り調査
- (2) 障害者福祉事業に関する調査研究

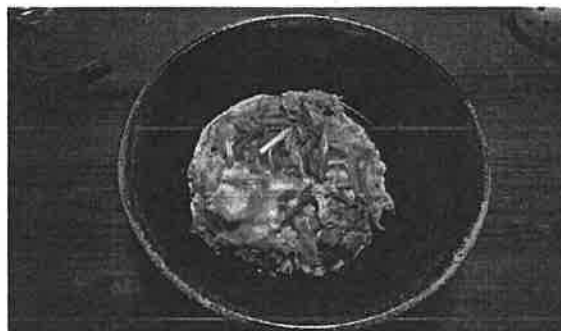
1 産業振興に関する調査研究

- (1) 畜産振興（土佐ジロー、はちきん地鶏等）に関する調査研究

高知県の特産地鶏の一つである土佐ジローについて、県農業振興部畜産振興課、畜産試験場（H27.8.18）において、生産販売の現状及び課題について調査、また、土佐ジローの生産者である（有）はたやま夢楽等を訪問（H27.9.16）し、現地調査及び意見交換を行った。

土佐ジローは、昭和 63 年に畜産試験場が庭先養鶏として開発した採卵用の地鶏であり、県内への普及を進めてきたが、生産者の高齢化や卵が割高なことなどもあり、近年、生産者や生産量が減少傾向にある（H26.2 生産農家 109 戸、雌 19160 羽、雄 5400 羽飼育）。安芸市畑山地区にある（有）はたやま夢楽では、採卵用以外に食肉用（雄）としての肥育事業を行い、近年、卵、肉ともにその味が評価され全国的に人気が出てきている。また、県事業を活用して安芸市内でチャレンジショップ（ジロー親子丼等）も展開してきた（H27.6～H28.3）。しかしながら、食肉用も含めた土佐ジローの普及拡大を図るにあたり、畜産試験場や関係団体が行う種卵の生産（う化率）や雛の供給体制、また、食肉用としての増体率（品種改良）、販売戦略（時期、販売先、生産量等）等の課題がある。今後、生産者、関係機関がそれらを共有し、同じベクトルで課題解決にあたる必要がある。





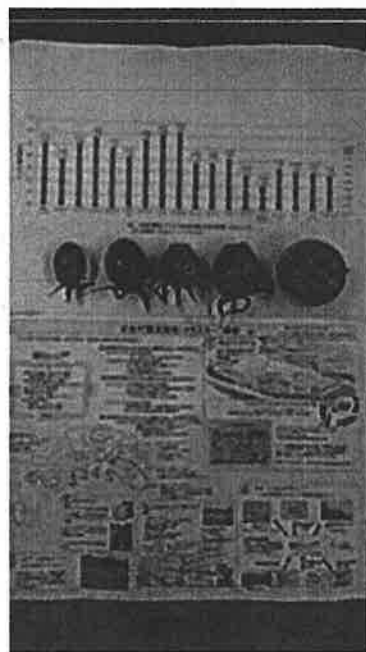
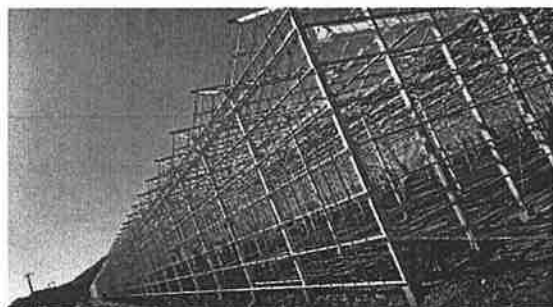
一方、平成18年に畜産試験場が食肉用の県産地鶏として開発した「はちきん地鶏」は、産業規模での食肉用として県内に普及しつつある（H25 60000羽飼育、300店舗で提供）。平成26年度に、大川村の株式会社むらびと本舗が経営する種鶏、孵卵センターに加えて、（合）土佐あぐりーどが運営する第2種鶏場も稼働し、生産拡大されたことから、本県のブランド鶏として生産、販売の拡大を目指している。そこで、大川村を訪ね、その現状と課題を調査した（H28.11.5）。標高800mという高冷地にあることや元水耕栽培施設を改良した鶏舎であることから、飼育には課題も多いとのことであるが、地元の低質材の有効活用も兼ねた薪ボイラーの導入による加温システムの工夫など、試行錯誤しながら課題解決に取り組んでいる。また、むらびと本舗では、交配から肥育、販売まで一貫して取り組んでおり、高知市内の事務所も含め16人を雇用している。謝肉祭でお会いした村長の「村に産業を作る！」との言葉が実践されている。



(2) 次世代型園芸ハウス団地等に関する調査研究

本県では、産業をもう一段力強く成長させていくために地域に根差した産業を核としたクラスターを地域地域で戦略的に生み出していくことが重要で、農業分野では、次世代型ハウスによる施設園芸団地を整備し、このハウスを核とした食品加工場、物流拠点、直販所、レストランなどの関連産業を集積させるといった形で、農業関連クラスターを作り出す取り組みが始まっている。その一つとして、四万十町に次世代園芸団地が整備されている。当団地は、県内最大となる4.3ヘクタールの高軒高ハウスでトマトを栽培し、雇用75名を創出、目標販売額約6億円を目指しており、それを核に様々な経済効果が相乗的に発揮されると期待している。

そこで、高知県担い手育成センターを訪問し、オランダ式の高軒高ハウス群、また、企業誘致による育苗施設など、次世代園芸団地の整備状況を調査した（H27.8.18、H28.2.10）。また、センターでは、オランダから取り寄せた高収量、高品質な優良18品種の試験栽培に取り組んでおり、次期園芸年度から栽培が始まる園芸団地、また、県内トマト産地への導入も含めた研究が行われている。園芸団地では、施設費等高コストであることも含め、10a当り1200万円の販売額を目指しており、その挑戦が様々な角度から始まっている。



(3) 県産農産物の流通事情に関する調査研究

J A土佐あき幹部、芸西村以東の首長さんらと、東京、大阪の中央卸売市場を訪問し、市場関係者等と意見交換を行った（H27.11.26～28）。その中で、かつて、本県のNO1品目であったナスについて、生産量が減少する中、特に、流通上のまとまりの弱さについての指摘があり、近年、ナスの振興に力を入れている熊本県との勢いの差を改めて実感した。園芸産地のまとまりについては、県の強力な支援もあり、技術的なまとまりが、各産地の部会、研究会等を中心に進んでおり、その成果の一つとして環境制御技術の導入や普及が進んでいるものと考えている。しかしながら、ナスなど一部の品目では、販売環境が大きく変化する中、流通上のまとまりが弱まっており、今、本県園芸農業の販売面での産地力が問われていると感じている。今後、次世代施設園芸団地を整備するに当たっても、こうした視点での産地力の強化が益々必要ではないかと考える。今回の視察を契機に官民一体となった産地再生をさらに加速化していく必要がある。



JR 大森駅に隣接する複合型商業施設アトレ内にある東急ストア大森店で開催されている大田市場まつりを視察し、東急ストア、㈱東京青果の担当者との意見交換を行った（H27.11.6）。東急ストア大森店では、10年以上前から高知野菜ブースを設置いただき、本県農産物の販売に貢献いただいている。野菜では、季節のゆず、定番商材の高知なす等が人気であった。今回は、11月5日から販売が開始された静岡県の三ヶ日みかん（静岡県内主体）について調査した。このみかんは、生鮮食品として初めて健康等への効能の食品表示が消費者庁から認められた事例であり、高知の野菜やゆず等に活用できないか、流通関係者の反応を調査したが、東急、イトーヨーカ堂、伊勢丹等にもまだ出回っておらず、関係者の話でも生鮮食品への機能性表示の今後の展開については不透明とのことであった。



(4) 台湾における観光産業及び本県産品の流通事情に関する調査研究

日台友好議員連盟として、台湾における観光産業及び本県産品の流通事情等について調査した（H28.3.22～25）。総督府など中央官庁の集まる台湾の霞ヶ関にある台北賓館を見学、日本統治時代の遺産を1911年に改修し、台湾の方々が大切に管理していただいております、両国の良好な関係の一端を見ることができた。台湾と日本との外交の窓口である亜東協会の蔡秘書長、李副参事らとの意見交換会では、会場の凱撒大飯店（中国の迎賓館）のスケールにも驚いたが、台湾と日本、高知との繋がりが、今後の交流の可能性について大変前向きな意見交換ができた。



2日目、台湾新幹線で台中へ移動したが、駅の電光掲示板、車両、内装の掃除システム等、日本の新幹線と殆んど同じであった。また、車窓からの風景も日本によく似ており、6人に1人の台湾の方々が日本を訪れるのも納得できた。

高知フェア等にも積極的に取り組んでいる高級量販店「裕毛屋」を訪問した。社長、店長から熱心な説明を受け、沢山の自社製品の試食をさせていただいた。当店では、無添加、無農薬など、食品の安全安心に拘った商品づくり、ゴミを出さない独自のパッケージ、無駄なく美味しい冷凍食品を主体に独自の経営を展開している。中でも高温急速冷凍の焼きたてパンは冷凍食品とは思えない味、品質であった。また、日本製品は、台湾の消費者に安全安心、高品質で定着しており、価格は高いものの人気商品が多いとのこと。また、高知の商品も沢山取り扱っていただいております、日本酒では、四万十川、司牡丹、仙頭梅酒等が人気とのこと。昨年は、3回の高知フェアを開催、本県産の商品は50アイテム程度あり、まだまだ開拓したいとの話に今後の展開が期待できた。



台湾のシリコンバレーと言われる新竹県の県庁を訪問し、エネルギーな知事らとの意見交換を行った。修学旅行、マンガ等を通じた学生の交流等、大変建設的なお話をいただいた。その後、台湾旅行会社（7社）の関係者との意見交換会を行った。その中で、ここ数年で台湾からの訪日観光客は150から380万人に急増し、団体から個人ツアーへと大きく変化しているとの報告があった。しかしながら、高知県の知名度は低く、観光客誘致には、直行便等の交通手段、ホテルの予約システム、宿泊料、観光ルートなど多くの課題があることが分かった。なお、各社とも日本の地方へのツアーに力を入れており、本県の観光部局も含めて、今後の展開に期待できるものと感じた。



最終日、通訳の歐さんの勤める丸虎国際顧問有限公司を訪問した。当社は、昨年度から高知県の台湾における現地拠点として、食品、工業製品の販売促進や観光等の事業実施や情報収集等、重要な役割担っている。昨年は、台湾で初めてとなる防災セミナー・商談会を開催し、大変な反響があったとのことである。今後の取り組みに期待したい。続いて高級量販店の微風広場の食品コーナーを見学、西川副社長から話を聞いた。全ての商品で高品質、安全性、美味しさが求められており、その中でも高知産のゆず、野菜、ポン酢、日本酒等は定番化しているとのこと。年数回開催する高知県フェアでは、カツオのたたきが好評で、食べ方も現地で定着しつつあるとのこと。それにしてもキャベツが800円、カボチャ2000円、ゆず800円/玉と大変高価であることに驚いた。なお、副社長の話では、今後更に海外の安い輸入品が入って来るため、良いものしか残らなくなるとのことである。





ジブリ作品の「千と千尋の神隠し」のモデルとなったノスタルジックな建物で世界的に有名になった観光地、九イ分を訪問した。雨にも関わらず大変な数の観光客であった。漫画を含め、様々な意味で日本との繋がり深感銘した。



2 防災対策に関する調査研究

南海トラフ地震津波対策に関する調査研究

下村県議に案内いただき、第一回黒潮町地区防災計画シンポジウムに参加させていただいた（H27.10.31）。黒潮町では、日本最大の津波高 34m が発表されて以降、地域が一体となった防災減災の取り組みが進んでおり、各地区の自主防災組織の取り組み報告、町の命を守る防災教育の取り組み、そして小学生の成果発表、特に子供たちの大きな敵に立ち向かう真摯な姿に感銘を受けた。また、行政だけでなく、京都大学、群馬大学、NHK などとの連携も大変参考になった。黒潮町長、教育長にもご挨拶させていただき、11月10日から大方高校で開催する池田秋涛先生の東日本大震災のパネル展についても紹介させていただいた。会場近くにある大方あかつき館は、地元の生んだ上林暁さんの偉業を称える文学館であるが、建物裏の避難棟と一体化した美しい建物は黒潮町ならではの感心した。



香川県の書家池田秋涛先生がボランティアで開催している東日本大震災にかかる「3.11からのメッセージ展」に感銘を受け、特に、津波被害が想定される本県の海岸沿いの市町村（安芸市、芸西村、高知市、黒潮町）において、これまで8回の開催を支援し、多くの方々にご覧いただき防災への意識を高めていただいた。安芸市の自主防災組織女性部会の仙頭会長らと池田先生宅を訪問し、女性部会の研修会における講演を依頼した（H27.9.22）。11月24日の研修会では、長いボランティア活動の中で、寄り添った被災者の皆さんの心や言葉について語っていただき歌も聞かせていただいた。「人として」「生きる」などの歌を聴いていると自然に涙が流れ、「感動的な研修で防災意識が高まった」との感想も多くの方からいただいた。



第4回高知防災危機管理展 2015 において、防災に関する県内外の関連企業や団体等の取り組みについて調査した（H27.8.22）50 駒以上のブースで様々な防災グッズの紹介や豪雨、土石流、地震の体感イベント等が行われ、防災の取り組みが産業化していることを実感した。また、会場では消防車や水上バイクに乗って記念写真をとる親子連れも多く、楽しみながら防災について学べるイベントで小さい時からの防災教育にも役立っていると感じた。驚いたのは、実行委員会のメンバー、スタッフが大変若いことで、今後の防災への取り組みに期待が高まった。



三石県議会議長の東部地区視察に同行し、室戸市佐喜浜町で建設中の全国初の津波避難シェルターの工事現場を見学させていただいた。初めての取り組みであり受注業者も苦勞しているとのことであったが、完成後は、地区住民が高齢化する中、自主防災組織を含めた避難計画、訓練、役割分担など、ソフト面での対策の充実が重要と感じた。



3 地域行政課題全般に関する調査研究

(1) 県及び市町村の関係部局が行う事業に関する聞き取り調査

下村県議と幡多地域の首長さんらを訪問させていただき、地域の行政課題や対策等について意見交換させていただいた（H28.2.9～10）。黒潮町長、四万十市長、大月町長、宿毛市長、土佐清水市商工会会頭、JA 高知はたを訪問し、各々から貴重なご意見をいただき、県と市町村との役割分担や連携など、今後の議員活動の参考となった。



下村県議がその立ち上げに関わった黒潮町大方の道の駅「ビオスおおがた」、人工芝サッカー場建設予定地、黒潮町庁舎の高台移転予定地等を見学した。黒潮町では、地震津波対策を踏まえ、様々な街づくりの取り組みが進んでおり、大変参考となった。





(2) 障害者福祉事業に関する調査研究

高知福祉機器展「バリアフリーフェスティバル」を開催している団体である「生き生きサポートセンターうえるば高知」が主催する「川ガキ楽校」にスタッフとして参加させていただいた

(H27.9.5)。このイベントは、障害者の皆さんやそのご家族が自然の中で楽しみ、宿泊体験できるイベントで、四万十市西土佐にある四万十楽舎（廃校となった中半小学校を活用した自然体験型宿泊施設）との連携事業として今回で6回目とのこと。移動や川遊び等では、沢山の福祉機器が活躍しており、こうした機器類の進化やご家族、スタッフの皆さんの気持ちによって楽しいイベントが継続できていることを実感した。何より参加者の皆さんの笑顔が素晴らしかった。

